



代表取締役社長 矢口喜一郎氏



当社全景

株式会社 つくば研究支援センター

代表取締役社長 矢口 喜一郎 氏

■会社概要

本 社：茨城県つくば市千現 2-1-6
 設 立：昭和 63 年 2 月
 資 本 金：28 億円
 従 業 員：17 名
 事業内容：産学官連携による新事業創出および地域中小企業の支援。これらを推進するための事務室・研究室・インキュベーションルームの提供。

株式会社 つくば研究支援センターは、研究学園都市「つくば」に立地し、産学官連携の下、新事業の創出から企業育成まで様々な支援を行う第 3 セクターの産業支援機関です。同社の代表取締役社長である矢口喜一郎氏に、事業の概要・特徴・近況、「地方創生」に果たす「つくば」の役割と「つくば発ベンチャー」の可能性等について伺いました。

(インタビュー：平成 26 年 10 月 29 日)

(聞き手／筑波総研株式会社 取締役社長 木下康之)

貴社の事業内容と事業の特徴等について、簡単にお教えてください。

当社は、1988年2月に茨城県や民間企業等76社の出資によって設立され、今年で27年目を迎えます。筑波研究学園都市が昨年建設50周年を迎えましたが、当社運営の基本は、この「つくば」に立地するという特徴を活かして、産学官金の交流・連携のもとに、新産業・新事業の創出・育成を図り、地域の活性化に役立つことであります。

1998年の「TLO法(大学等技術移転促進法)」の施行、2000年の国立大学教員の兼業禁止の緩和等によって、2000年以降、この「つくば」においてもベンチャー企業の創出が活発化してきました。そうした動きも踏まえて、当社は、起業段階からスタートアップ(事業立上げ)、アーリー

ステージ(成長初期)、ミドルステージ(本格的成長)、レイトステージ(経営基盤強化)まで、ベンチャー企業を支援する様々な事業を行っています。

具体的には、①レンタルラボ(36室)、大型実験室(7室)、レンタルオフィス(49室)、インキュベーションルーム(15室)等の提供、②茨城県のインキュベーション施設「つくば創業プラザ」(24室)の指定管理者としての運営、③ベンチャー企業の育成事業、④産学官連携事業(ネットワーク形成、競争的研究資金獲得支援、情報提供等)等です。



シェアードオフィス

つくばエクスプレス沿線では、柏市の柏の葉キャンパス駅周辺にも創業支援施設が立地していますが、御社の特徴はどのような点でしょうか。

当社の特徴は、何といたっても「つくば」に立地していることです。筑波大学や産業技術総合研究

所（以下、産総研）を中心とした公的研究機関と連携した企業支援が可能なことです。連携という点では、地域活性化を図る上で、自治体との関係も大変重要であり、茨城県の委託による成長産業振興プロジェクト事業では、県内中小企業の成長分野（環境・新エネルギー、健康・医療機器、食品分野）への参入を促進していますとともに、つくば市の委託により、地域企業の経営力強化を図るため、知的資産を活用した知的資産経営の支援等を行っております。

また、入居企業約80社の内、半数近くがベンチャー企業であることも当社の特徴です。これが事業内容の特徴ともなっており、ハード面では、机ひとつの創業準備段階から、事業の成長段階に応じて同じ建物の中で施設の拡張が可能なことです。ソフト面では、当社のインキュベーションマネージャーと専門家の連携による実務面の支援（税務会計、財務、労務等の他）、大学・研究機関との連携による技術や製品開発の支援、ビジネスマッチング会の開催や展示会への出展による販路開拓支援等があげられます。特に、ホットな情報を提供する「耳よりセミナー」、毎月ゼロの付く日に入居者同士が交流する「ゼロのお茶会」、大学や研究機関とタイアップして開催する「ベンチャー発表会」、年1回産学官金の連携に携わる

方々と入居者が交流する「交流会」等は、当社独自のユニークな企画です。

「つくば発ベンチャー」の特徴や現況についてお教えください。

「つくば」ではこれまでに200社を超えるベンチャー企業が誕生し、地域活性化に貢献しております。最近では、筑波大学発ベンチャーのCYBERDYNE（株）（サイバーダイン、代表・山海嘉之氏）が本年3月に東証マザーズに上場を果たし注目されています。

「つくば発ベンチャー」は、「大学発ベンチャー」、「公的研究機関発ベンチャー」、「民間企業スピンアウト型ベンチャー」の3つのタイプがあり、それぞれ1/3という構成です。また、業種は多岐にわたり、研究シーズを活用したものづくりや、高度なIT技術の事業化、科学的知見に基づくサービスの提供等、「つくば」の科学技術等をコアにしたもので、地域特性が表れたベンチャー企業が多くなっています。

昨年12月の当社の実態調査によれば、「つくば発ベンチャー」は、創業時の資金の約9割を本人と親族・友人・知人から調達していること、設立後10年経過していない企業が66%占めているが、約4割は売上や雇用を伸ばしていること、これまでの事業評価では「成功である」と「おおむね成功である」が52%を占めていること、今後海外取引・海外進出も視野に入れている企業が少しずつ増えていること等が明らかになりました。

そのような動向を踏まえた最近の貴社のベンチャー支援策についてお教えください。

わが国全体の開業率は、1980年代から低下しており、2012年度は4.6%と欧米の半分以下になりました。そこで、政府の「日本再興戦略」の中で「産業の新陳代謝とベンチャーの加速化」を柱の一つに掲げ、開業率を欧米並みの10%台に引き上げることを目標に、本年1月より「産業競争力強化法」が施行されました。

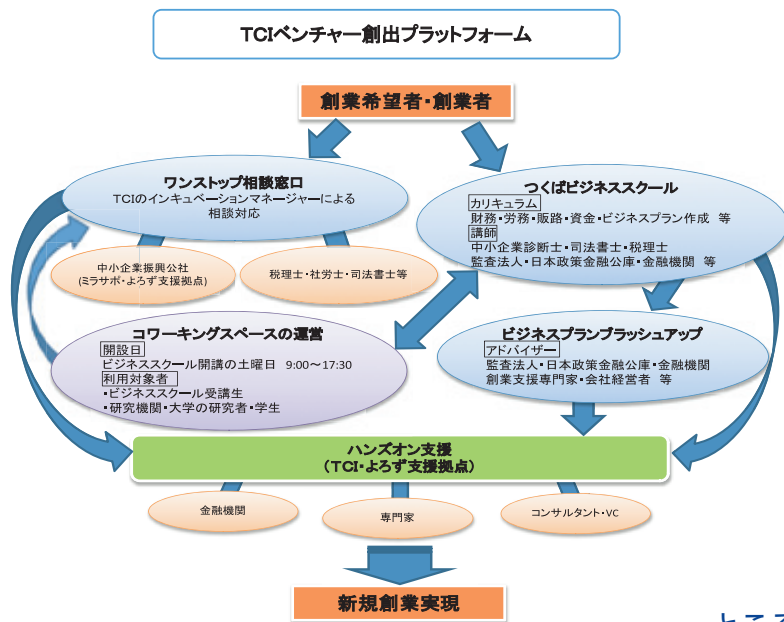
つくば市では、同法に基づく「創業支援事業計画」の認定を受け、大学・研究機関・商工団体・産業支援機関・金融機関等が協力し合い創業者をサポートする「つくば創業支援ネットワーク」を



「耳よりセミナー」助成金説明会



「ビジネスマッチング会」の光景



(資料)つくば研究支援センター

構築し、地域における新規創業を積極的に支援しています。当社もこのネットワークの一員として、技術系ベンチャー企業の創出支援を担う中核的な役割を果たすために、本年10月より、新たなベンチャー創出策と支援サービスを提供することにしました。

1つは、「創業スクール」です。技術系ベンチャー創業に必要な基礎的知識に加えて、製品開発、販



創業スクール



コワーキングスペース

路獲得、資金調達等の知識やノウハウが身につくカリキュラムを準備しました。もう1つは、「コワーキングスペース開設」です。当センター内のロビーを利用して毎週土曜日、ベンチャー企業や創業予定者のためのワークスペース、約50席を準備し、利用者同士で気軽な交流が図れるようにしました。

つくばが、イノベーションの拠点地域として、国の成長戦略に貢献できるよう当社としてもその一端を担っていきたくと考えています。

ところで、「地方創生」に果たす「つくば」の役割、「つくば発ベンチャー」の位置づけ等について、矢口社長はどのようにお考えでしょうか。

「日本創成会議」(代表・増田寛也氏)の「消滅可能性都市」が話題になり、出生率低下に加え、地方から東京圏への人口流出が止まらないことが問題視されています。若者をいかに地方に留めまた呼び込んでいくか、茨城県でも大きな課題であると思っています。

茨城県の工業開発は、明治・大正からの工業集積地であった日立地区と、1963年の閣議決定後に建設された鹿島臨海工業地区は別にして、東京から国道4号線沿い、国道6号線沿いに南北に放射状に伸びてきました。このような南北の道路体系によって、人やモノが東京へと移動したわけです。これから人の流れをどこで堰き止めるかが重要になると思います。

ここで、茨城県が進めてきた北関東自動車道と圏央道という二つの東西を結ぶ交通体系の整備は、その解決に寄与しそうな気がします。すなわち、群馬・栃木・茨城3県そして常陸那珂港区を結ぶ線に沿って新しい産業集積や人・モノ・情報の流れが起こり、地域のものづくりが変革を遂げ稼ぐ力を高めることで、人の流れ、若者の流れが堰き止められないでしょうか。

特に、常磐道と圏央道が交差する、ここ「つくば」地区は、今度は成田空港と直結し世界との交流基盤がさらに充実するとともに、県南・県西の新たな連携軸が形成されます。2020年の東京五輪・パラリンピック開催もつくばにとっては重要

な要素であります。「つくば」は、こうしたチャンスを見逃さず地域の特性を一層発揮し、広域の中核都市として、人の交流を活発化して新しい稼ぐ力を生み出していくことが重要であります。CYBERDYNE（株）のようなベンチャー企業が次々に出現して、ベンチャー企業の加速化に繋がればいいと思います。

「地方創生」と「つくば」の役割について、示唆に富むお話、勉強になります。東西の道路体系の整備が待たれるところです。それとのかかわりで、矢口社長は、「つくば」が「シリコンバレー」のような地域になるために、どのようなことが必要であり、今後どのような施策が重要であるとお考えでしょうか。

「つくば」がシリコンバレーのような地域になることが夢ではありますが、日本のベンチャービジネスへの取り



矢口社長

組みとアメリカとは30年以上、歴史の差があります。シリコンバレーのベンチャーファンドが1960年代に多数設立され、1970年代にはアップルやグーグルのようなベンチャー企業が誕生しました。そして巨大化したベンチャー企業がM&Aでベンチャー企業を買収したり、エンジェルとなって次世代のベンチャー企業に投資をしたりというエコシステムが形成され、さらに進化を続けています。2012年のベンチャーへの投資額は、日本の1,200億円に対して、アメリカは3兆円です。また、シリコンバレーには、お金だけではなく、世界中から有能な人材も集まってきました。

日本でも、「つくば」でも、「芽」は出てきています。それを大事に育てながら、環境を充実していく必要があります。

人材の面は、日本の若者はアメリカに比べて「起業家精神」が低いと言われますが、中学・高校での疑似体験授業等も含めて「教育」も重要であるほか、優秀な外国の方を呼び込むことも必要だと思います。また、若い企業家が夢を実現していく上

で、それをサポートしてくれる経験豊富なメンターは心強い存在であります。CYBERDYNE（株）の山海先生のように、世界の市場を見ながらビジネスプランを作るような企業家がこれからも「つくば」に現れて、若者に夢を与え、つくば発の「スーパーベンチャー企業」が出現することを期待しています。

最後に、矢口社長のご趣味、座右の銘をお教えください。

座右の銘は、「人事を尽くして天命を待つ」です。「報われない努力はない」と思っています。趣味というわけではありませんが、暇が来ると映画を見ます。その際に、原作を見た後で映画を見ることにしています。原作を読みながら、配役や映画の作り方、俳優の演技方、ロケ地のイメージ等に想いを馳せるわけです。最近、「蝸の記」（原作・葉室麟、監督・小泉堯史）を見ました。物語も素晴らしいですが、映画も配役が原作にマッチし、ロケ地もイメージ通りで、人間としての生き方を痛感させられる感動の映画でした。

今日はお忙しいところ長時間にわたり、「つくば」のベンチャー企業のお話から「地方創生」との係わり、そのヒント等をお教えいただき、さらに映画の楽しみ方までご教示いただきましてありがとうございました。時間のたつのも忘れて聞き惚れてしまいました。

これからも「つくば」、茨城県の発展のために一緒にさせていただきたいと存じます。よろしくお願い申し上げます。



矢口社長(写真右)と聞き手・木下康之

文責／筑波総研 株式会社 主席研究員 熊坂敏彦